

愛知淑徳大学院創設と同窓生の底力

愛知淑徳大学名誉教授 大野光子

愛知淑徳大学大学院設立後すでに 25 年と伺い、改めて年月の過ぎる速さに驚きます。振りかえれば、設立準備のため関係教員も事務方も東奔西走の月日があり、ようやく認可が下りた時には、果たして志願者が集まるかという心配もありましたが、蓋をあけてみると英文学専攻科は8名の一期生を得て、院は順調にスタートしました。

学生たちは、主に英語教育の世界で頑張ってきた愛知淑徳大卒業生と知って、数年前に学部へ赴任するまで中部の女子大事情に疎かった私は、愛知淑徳大学同窓生の底力に感じ入りました。その上、英米文学・英語学・英語教育学の3分野に分散した新入生のうち、8名が私の担当する講座を受講希望と聞き、驚くとともに、彼らのフレッシュな学習意欲・向上心をどう刺激しようかと、楽しみに講義計画を練ったことを思い出します。

学部指導でも心がけていた英語力の向上は当然として、新進の学問分野であったフェミニズム批評を意識しつつ、当時まだ世界的にも歴史の新しいアイルランド文学研究という概念に親しんでもらうこと。これらが目標でした。いずれも馴染みが薄い分野であったため、受講生側は興味は持てたものの準備が大変だったと、後に知りました。実際には、例えばオスカー・ワイルドの「サロメ」のように、ほとんどの人たちが少なくとも英文学として知っているか読んだこともあったりする作品群を選び、大学院の授業にふさわしく、分担して読解・分析し、新たな光を当てる作業を積上げていったつもりでしたが・・・。

初めて大学院を担当した教員の意気込みばかりが勝っていたかも知れませんが、人数の助けもあって、初年度は賑やかに楽しく進みました。その後、一期生からは山田久美子さんがアイルランド文学研究に進まれ、当時京都で開催された国際アイルランド文学協会世界大会にも参加されました。その後も、私が学会事務局長や会長をお引き受けした時には、河口和子さん、河合利江さん、井土康仁さん他の後輩と共に支えてくれ、嬉しいことに皆さん現在大学教員として活躍しておられます。修了生たちが、研究を通して日本ばかりでなく海外にも活躍の場を拓げ、ネットワークを築いていかれる姿を、心から頼もしく思っている次第です。

残念ながら改組により英文学研究科は消滅しましたが、ここから巣立った皆さんが今日までも学会活動を続けてこられたご努力に敬意を表するとともに、愛知淑徳大学院同窓生の底力を改めて感じています。